

# 雑誌『文芸戦線』における日中文化交流

—北伐戦争時期を中心に—

はじめに

近年、戦時期のメディアに対する関心が高まっています。その代表的な研究には、山本武利の『朝日新聞の中国侵略』（文藝春秋、二〇一一年）、大橋毅彦・竹松良明編の『新聞で見る戦時上海の文化総覧・「大陸新報」文芸文化記事細目』（ゆまに書房、二〇一二年）、上海において刊行されていた邦文・中文・欧文の雑誌・新聞を多言語横断的に研究した『戦時上海のメディア—文化的ポリテクスの視座から』（高綱博文・石川照子・竹松良明・大橋毅彦編、研文出版、二〇一六年）などがある。これらの研究は、メディアを通して文芸作品の研究のみならず、日中の文化的・歴史的な実相を読み解く方法も模索した。本論は、雑誌『文芸戦線』に注目し、中国国民革命運動と

の関わりを通じて、日中のプロレタリア運動における文化交流について考察する。

まずは、雑誌『文芸戦線』の性格を確認した上で、雑誌の同人たちがどのように日本国内のプロレタリア運動と結合し、中国北伐戦争を支持したかを分析する。次に、一九二七年から一九二八年にかけて、中国の革命運動の進行とともに、同人の佐野袈裟美、柏八里らが革命の状況を分析した評論に着目し、日本のプロレタリアートが中国革命をどのように日本へ発信したかを検討する。さらに、同人の里村欣三と小牧近江の上海体験のルポルタージュ及び上海で交流があった中国人作家たちの文章に基づき、当時の日中プロレタリア作家の交流の実態を把握する。最後に、中国革命運動を題材にした日中作家の詩を基に日中文化交流における作品の役割を論じる。

邵 金 琪

## 一、雑誌『文芸戦線』と「対支非干渉運動」

雑誌『文芸戦線』の編集方針が、より国際的な視野を入れ、政治的暴露に一層力を入れるようになったのは、山田清三郎の編集になってからである。その時期から、頻繁に中国革命の状況を紹介するようになった。『文芸戦線』における日中文化交流の過程を論じる為には、まず雑誌の性格を確認し、同人たちの中国革命に対する支持の取り組みについて考察していく必要がある。

一九二四年六月に、青野季吉・金子洋文ら十三人で創刊された当時の綱領は「一、我等は無産階級解放運動に於ける芸術上の共同戦線に立つ。一、無産階級解放運動に於ける各個人の思想及行動は自由である」というものであった。革命運動の政治的側面は避けて、文芸上の共同戦線を旨とするという性格を持っていた。一九二五年一月号で資金難により休刊になるが、それまで編集は金子洋文があたった。

その後同年六月に復刊し、以後一九二七年十一月号までは、山田清三郎が編集と経営にあたった。一九二五年十二月にプロレタリア文学陣営を統合したはじめの文学運動組織である日本プロレタリア文芸連盟（以下、プロ連）の結成があり、『文

芸戦線』はその中心的存在になった。一九二六年九月号に青野季吉の高名な評論「自然生長と目的意識」が発表され、それを契機として、アナキストを排除し、プロ連を改組してプロレタリア文芸連盟とした。一九二七年以後、革命戦略をめぐっての方針の違いが文学運動にも及んだ。

その方針による理論の探究について、田中憲一は『文芸戦線』四月号の「プロレタリア文芸運動の現段階と其の任務」と五月号の「プロレタリア文芸運動の方向転換は如何にして可能である？」で詳しく論じている。現段階の『文芸戦線』におけるプロレタリア文芸運動は、自然発生的文芸運動からマルクス主義的文芸運動へと進展したとする田中は、どのような文芸理論を持つべきかについて、以下のように述べている。

我プロレタリア文芸運動は、今や所謂方向転換期に当面临し全無産階級の解放運動の一翼たるの自覚に於て、その方向をマルクス主義的政治闘争へ転換せんとしつつある。従来、無産階級運動に対する自己の機械的結合を批判、揚棄しつつ真実なる弁証法的結合に於て、其職分を正確且果敢に遂行せんとしつつある。（中略）現段階に於けるプロレタリア文芸運動は運動が単に目的意識を以て始めると云ふ漠然た

る規定と、この規定の下に、政治的暴露をなさねばならぬ<sup>3)</sup>。

田中の論述は、編集の山田清三郎に青野季吉「自然生長と目的意識」論とともに、雑誌の方向転換期の二大収穫であると高く評価された。一九二七年五月号に、プロレタリア作家の創作方針について山田自身も以下のように語っている。

芸術家は必ずしも（狭義の）政治家たらねばならぬといふことはない。政治家が必ずしも芸術家たらねばならぬといふことのないと同様に。だが、彼が真にプロレタリア作家たるには、常に無産階級運動の最前線たる、政治戦線と緊密不離な接触を保つてゐなければならぬ。ひとり題材<sup>マ</sup>獲後<sup>マ</sup>の上だけではない、彼が常により社会主義者としての左翼意識を高め、深めるために<sup>4)</sup>。

そこから、プロレタリア文学も無産階級運動の一環として役に立たなければならぬ、というように編集の方針が変化しつつあった。七月号の「新主体の確立と『文芸戦線』<sup>5)</sup>」という声明では、日本共産党系と袂を分かち、青野季吉・葉山嘉樹・前

田河広一郎・平林たい子らが労農芸術家連盟を結成した。それと同時に、「同志間の同人雑誌に依つて出されて来たのであつた」『文芸戦線』が、「本号を最終として、本誌はその編集発行の権限の一切を挙げて、これを労農芸術家連盟の所属に移すこととした」ことが宣言された。同号に掲載された「労農芸術家連盟綱領（草案）」<sup>6)</sup>には、日本のプロレタリア運動も国際的な視野を入れ、「万国無産階級文芸家協会への加入」、「太平洋沿岸被圧階級文芸家連盟確立促進」などに取り組むことで、中国を含めた海外の無産階級文学運動へと進出していた。そして、労農芸術家連盟員のプロレタリア文学の創作は「自然発生的な、偶発的な、無政府的なもの」から、「組織的、統一的に」変化し、作家や評論家の意志が連盟の統制下に置かれた。このように、雑誌『文芸戦線』の掲載文は政治闘争への参加を要求し、連盟の国際過程の闘争も反映した。プロレタリア文芸雑誌と組織の結合によって、政治的な目的意識が露骨に反映されつつあったのである。特に、中国の北伐戦争及びその時期の日本国内の「対支非干渉運動」への関心は高いものであった。

一九二六年七月、蒋介石は国民革命軍総司令となり、北伐を開始した。国民革命軍は、武装した労働者、農民に支援されながら広東省から北上し、武漢、南京を占領して上海に迫り、

一九二六年から一九二七年にかけての北伐国民革命軍上海入城に呼応するため、上海三次暴動を起こした。一九二七年三月二十一日には第三次暴動が成功し、上海特別政府が成立したが、四月十二日の蒋介石の反共クーデターによつて、最終的に北伐戦争における無産階級革命は失敗に終わった。<sup>7)</sup>

一方、日本では、一九二七年四月二十日に田中義一内閣が誕生し、居留民の生命財産保護の名目で中国全土の統一をめざす国民革命軍の北上を阻止するため、中国山東省への出兵が、一九二七年五月、一九二八年四月・五月の三回行われ、第二次出兵では濟南事件を引き起こした。その結果、中国民衆の排日運動が激化した。こうした動きに反対し、北伐革命擁護のために日本のプロレタリアート達を取り組んだのが「対支非干渉運動」である。

一九二七年七月号には田中義一宛の「対支出兵反対決議」<sup>8)</sup>が以下のように掲げられた。

我が労働芸術家連盟員の雑誌「文芸戦線」に於いては、対支非干渉全国同盟に積極的に参加し、該同盟に実行委員<sup>9)</sup>を送つてゐるが、今回の出兵反対週間にあつて、左の如き決議を該同盟を通じて反動政府にたたつけた。

(中略)

我等は田中内閣の出兵に反対し即時撤兵を要求す。

(中略)

昭和二年六月十八日

労働芸術家連盟演劇部の会

この時期の文芸戦線社は、毎号の「労働芸術家連盟情報」において「対支非干渉運動」の状況を載せ、編集の山田清三郎をはじめとする同人たちが、「対支非干渉全国同盟」の会議や演説会などに出席していた状況も詳細に記録された。「文芸戦線」の同人たちからは、日本政府の山東出兵に対する批判と「対支非干渉運動」への声援が見られる。彼らが掲げていたプロレタリア芸術運動の基底である現在の社会への否定的意志も表している。

政府への抗議以外に、中国に行く日本兵に対する呼びかけも行った。一九二七年に労働芸術家連盟の書記長となつた上野壮夫は、「支那へ行くのか」(同年九月)という詩を『文芸戦線』に発表した。上野は、アナキズム系の『黒風時代』『アクション』の同人を経て、『文芸戦線』に参加し、「全世界の同志は」「報告」などの詩を発表した。まもなく前衛芸術家同盟の結成に加わり、

その後日本プロレタリア作家同盟に加入し、『戦旗』の編集に  
したがう一方、詩「戦争へ」、小説「跳弾」「燻る」などを同誌に、  
詩「三月の歌」、小説「日華製粉工場」などを『プロレタリア  
文学』に発表した。<sup>9</sup>その詩は、一般の日本兵士たちもかつて資  
本家に搾取された無産階級の労働者であることが前提となつて  
いる。

昨日まで、そして今日も

お前達の背中には

残酷な地主の鞭が唸つてゐるのだ！

非道な資本家どもの搾取機が備へつけられてゐるのだ！

(中略)

散々をお前達を苦しめ抜いてゐるそいつを、

いつの間にお前達は忘れたのだ？

昨日まで、お前達は

あいつ等を憎んでゐたではないか！

あいつ等をやつ、けようと思つてゐたではないか。

(中略)

お前達と同じ憎悪から、叛逆から、

振ひ立つた支那の兄弟を〇〇〇〇に行くといふのか？

お前達のやうにぶちのめされてゐる支那の民衆を、お前  
達をぶちのめしたあいつ等のために、

〇〇〇〇に行くといふのか？

兵士達、兄弟よ！

今、お前達は何をしようとしてゐるか

考へて見るがい、！

あいつ等の口実や

あいつ等の胡魔化しを信ずるな！

日本兵士が中国へ行つて中国の労働者と戦うことは、日本の  
資本主義の味方となり、中国の労働者を苦しめることになる。  
その要因は、中国の北伐戦争の性質によつて決定された。中国  
国民革命軍の北上につれて、今まで帝國主義国家の資本の侵入  
を許した旧政府が倒され、新しい政府が成立したが、それは帝  
國主義国家のイギリス、日本などが行つた中国の侵略計画の妨  
げになった。日本居留民の財産保護というのが口実であり、実  
情は中国への経済侵略を続けるためであった。上野は、労働者  
であつた一般の日本兵士が資本主義の罠に騙されないように強  
調した。さらに、詩の最後に、武器を持たされた民衆に資本家

という敵に目を向けるべきだと呼びかけていた。

その詩は、日本政府が兵士を中国に送り込むことへの反対を表現したと同時に、日本における無産階級の人たちが圧迫された現実と、全世界の無産階級の群衆が協力して資本主義という共同の敵と戦うことをアピールしていると思われる。

文芸戦線社は、日本国内における無産階級革命運動に取り組み、プロレタリア作家の活動状況などを掲載するとともに、中国の北伐革命運動についての情報も同時に日本の民衆に発信していた。次に中国の国民革命について、『文芸戦線』の同人たちがどのように報道したかを詳しく考察していく。

## 二、日中プロレタリア評論家の交流

まさに編集方針が変わる時期と重なるが、中国の国民革命運動にも大きな変化があった。新しい方針の下に、『文芸戦線』は世界各地のプロレタリア運動の動きを報道し、初期の理論的な紹介とは違い、同人らの見解も示された。代表的なのは佐野袈裟美と柏八里の論考である。

### 1、佐野袈裟美の論考

劇作家、評論家として活動していた佐野袈裟美は、一九二三年四月に『種蒔く人』の同人となり、一九二四年六月に『文芸戦線』の創刊とともに同人に参加し、初期プロレタリア文芸運動に力を添えた。その後、労農芸術家連盟に属していたが、一九二八年十一月日本プロレタリア文化連盟の中央協議員となった。<sup>⑩</sup>『文芸戦線』同人の時期に、ロシア、中国の無産階級革命運動について、特に、中国国民革命期における中国社会に注目し、「支那の国民革命とその必然的展開」(一九二七年四月)、「支那革命の危機」(一九二七年六月)の二篇を発表した。一九二六年七月から一九二七年三月までのわずか九ヶ月の間に、国民革命軍は武漢政府を樹立し、南京、上海の長江流域までに至り、段階的な成功を収めた。この時期の国民革命の性質について、佐野は以下のように述べている。

支那に於いては、かくして国民革命の進展と同時に、無産階級運動も進展して行く。(中略)

最も組織化されてゐる支那のプロレタリアートは更にその革命を展開せしめ得て、サヴェートに近い組織を生み出すことの出来る多くの可能性を持つてゐるのである。<sup>⑪</sup>

国民革命軍による北伐は、「ブルジョア民主主義的革命」であるという本質が指摘され、また、今後の展開について、国民党と共産党の合作によって、労働者や農民を主導する組織活動が発展することを期待し、さらにソヴェート革命運動へと繋げていくことを予想した。世界への影響については、中国国民革命は、帝国主義への反対から帝国主義との戦争へと導かれると述べた。また、中国社会の現状の分析では、検閲制度が存在したにも関わらず、日本の資本の侵略圧迫に対する政府批判も明記され、国民革命への支持を表明した。

しかし、佐野の期待を裏切って、四月十二日の上海クーデター後、革命の情勢は一変する。六月号の「支那革命の危機」で佐野もその最新の状況に基づいて、国民革命軍総司令である蒋介石の革命意識の問題について、以下のように述べている。

蒋介石は革命軍進展の自然の勢ひに乗つて、いつの間にか独裁官になりすまさうとする傾向を示すやうになり、また革命の成功にあせるところから、ブルジョアジーとの妥協、帝国主義××との妥協に傾き、共産党や総工会を圧迫し、著しく意識的に右傾化し、進展しつつある革命を単な

るブルジョア革命に踏み止まらしめ、自己の権利の確立にひたすら焦慮するやうになつた。(中略)

国民革命を一先づ達成せしめるまでは、あく迄も隠忍しなくてはならない。ブルジョアジー及び小ブルジョアジーとの共同戦線を維持しなくてはならない。<sup>12)</sup>

蒋介石が起こしたクーデターは、国民革命の本来の目的である帝国主義者や軍閥者の打倒に叛き、反共政策を公然化していることを鋭く指摘し、蒋介石の反動化を非難した。そして、今後の中国無産階級革命の方向について、労働によるプロレタリア運動ではなく、労働とブルジョアジーとの共同革命という保守な意見を示したが、中国プロレタリア革命の更なる発展への期待も込めているのである。

佐野の評論は、中国における帝国主義、軍閥、国民党などの各勢力の状況を冷静に把握し、中国無産階級民衆及び共産党が直面する窮地を日本の同志に伝えていた。中国の革命の各段階の状況を把握し、中国革命を高く評価した、関心のある人にわかりやすい評論であると考えられる。

## 2、柏八里の論考

柏八里は、一九二七年までの中国国民革命について中国国民党と中国共産党の合作の失敗及び蒋介石の反動化に焦点を当て、一九二八年から一九二九年にかけて『文芸戦線』にて評論を書いた。柏は一九二七年から翌年にかけて、武漢に滞在したことがあり、現地で武漢国民政府左翼のプロレタリア革命家の李漢俊と出会い、革命運動やプロレタリア理論についての交流を続けた。<sup>(13)</sup>

一九二八年の新年号では、「中国国民革命の反動化」と題し、過去の一年中の中国国民革命を回顧している。その中で、一九二七年春から夏にかけての武漢国民政府を中心とする革命運動を高く評価したが、最終的には失敗したと捉え、蒋介石の革命意識の欠乏を批判した。そして、蒋介石が反共政策を掲げた後の国民党と共産党員との関係について、時間順に記録し、特に、武漢政府の中の共産党員や左翼派の状況を重点に置いて、日本の同志たちに蒋介石を代表する国民党の反動性及び中国共産党員の窮地を報告した。クーデター後、北伐戦争におけるプロレタリア革命が失敗したとはいえ、文芸戦線社は持続的に中国共産党の状況を発信し続け、中国プロレタリア革命を支援しようとしたのである。

しかし、国民革命の失敗によって、中国共産党員は殺害の危険に晒されることになった。その状況は以下のように述べられている。

所謂共産狩りの白熱化したのは一九二七年十一月末から十二月中旬にかけてであった。蒋介石一派の独占する南京政府からの命令によつて上海、南京、武漢、広東を始め各地に於いて惨忍な逮捕と殺害とが行はれた。(中略)彼(李漢俊)が、目と鼻との、日本租界内に居ようとは気づかなかつた。午後六時に彼が捕えられ、それから十五分後には、私はそれを知つた。もし、午後五時に、彼が捕えられた一時間前に、私がそれを知つて居たなら———そしたら、我々はこの有力な革命批判者を、も暫く我々の戦線の闘志として期待する事が出来たであらうに、そして二時間後の午後八時には私は彼が銃殺されたとの悲報を耳にしなければならなかつたのだつた。<sup>(14)</sup>

一九二九年四月号「四月クーデター国民革命の一九二七年」にも、一九二七年以降の中国各地のクーデターを詳しく記録し、殺害された共産党員について日本の同志に伝え、その死を惜し

む気持ちは示している。

『文芸戦線』における中国革命に関する報道には、佐野袈裟美のような随時の報告と、柏八里のような革命が終わった後の全体像から捉える論がある。厳しい検閲のもとで、継続的に中国のプロレタリア革命や中国共産党の活動を宣伝していくのは困難であったが、同誌はプロレタリア運動の言説を産出する場として機能していると言えるであろう。

さらに、「今、支那のプロレタリア作家諸君は、『戦旗』を始め『文芸戦線』その他に発表せられる我国のプロレタリア作品を競つて読んでゐるといふことである。」<sup>(15)</sup>という編集の山田清三郎のエッセイにあるように、日本の評論家による中国革命に対する応援や分析は、中国のプロレタリア作家にも届けられていた。では、『文芸戦線』を通じて、日中のプロレタリア作家たちの間にどんな交流があったかを考察していく。

### 三、日中のプロレタリア作家の交流

北伐戦争時期の『文芸戦線』における交流には、主に二つの形式がある。一つは同人を中国に送り、中国作家と交流することであり、もう一つは、日中の作家たちが中国革命への応援を

呼びかける文章を載せることである。

#### 1、里村欣三と小牧近江の上海行

中国の革命運動の状況を鑑み、文芸戦線社は同人を上海に派遣した。その派遣の経緯について、小牧の回想では、汎太平洋反帝会議に参加するため、自分から「派遣員としてこの会議に派遣させてほしいと申し出た」<sup>(16)</sup>という。編集の山田清三郎も以下のように回想している。

その頃の上海は、帝国主義列国の軍隊によつて、国民革命が武力干渉をうけていた。――蒋介石は革命を裏切つて、買弁軍閥になりさがつていた。そういう上海に、『文芸戦線』特派員をおくつたのだ。中国の革命的文学者と、日本のプロレタリア文学者の友誼をかため、相互の運動を協力し合うために。<sup>(17)</sup>

里村欣三と小牧近江の上海行は、最初から日中プロレタリア文学者の交流を図る目的があった。その成果として、二人はクーデター後の上海での体験を一九二七年六月号の「青天白日の国へ」、「新軍閥蒋介石の正体」に発表した。

里村はクーデター後の上海を、「青天白日旗のへん翻たる姿と共に平静に帰しつつある、かくて支那民衆はプロレタリア革命の過程をその途中から新軍閥の手に略奪されんとしてゐる」と記し、蒋介石について、「巧みに三民主義の仮面で民衆を欺瞞しつつ、しかもより巧みに新軍閥の野望を果たしつつある」と厳しく批判している。

そして、四月二十八日、二人は上海で中国の無産派文学者に会見しようとしたが、クーデター後の上海では難しくて諦めかけた時、郁達夫からの連絡があり、その日の深夜に会い、「革命のこと、蒋介石のこと」、中国の「プロレタリア文学のこと」について話したとある。翌日の昼に、郁達夫と田漢と会い、その日の夜には、傅彦長、張若谷、周文達も同席した。文中の二枚の図版は、その時の寄書であり、一枚は「大家点起、生命の火」、張若谷、もう一枚は「全世界無産階級文学此連合起来!」/民国十六年首夏遇里村小牧二氏/於滬上書此以作記念/田漢」である。中国文学者たちのプロレタリア運動への情熱は明白であり、文章の最後に、郭沫若と郁達夫の写真も添えられた。このときの交流の状況については、郁達夫も一九二七年四月二十八日の日記に書いている。

昨日出版部に戻った。日本芸文戦線社の代表である小牧近江と里村欣三氏が訪問してきた名刺を見た。だからもう一度出版社に戻り、夜にある広東酒館で彼らと一緒に少しお酒をご馳走した。彼らと今朝十一時に出版部に行く約束したから、早朝に出版部にいき、彼らのために一つの文章を作った。(中略) 午前十時ごろ、フランス租界のある写真館で写真を撮った。(中略) 田漢と一緒に彼らの泊まる孟淵旅館に行った。(中略) 午後六時半ごろ、医者周文達氏と一緒にまた孟淵旅館へ小牧・里村氏に会いに行った。美麗川菜館で晩ご飯を食べた。十時に彼らが日本へ帰る船まで見送った。<sup>(18)</sup>(拙訳)

郁達夫の日記は、「青天白日の国へ」に書かれた小牧と里村の上海で中国のプロレタリア文学者たちに会った日付、回数、場所とほぼ一致する。二人の報告の方には参加者の人名まで記録されている。「青天白日の国へ」は単なる紀行文ではなく、同号の「日本の無産階級文芸界同志に訴ふ」、「中国文学者の英国智識階級及び一般の民衆に対する宣言」、「新軍閥蒋介石の正体」を合わせて読めば、中国のプロレタリア作家たちの熱意が文字を通して、日本の大衆を動かさずにはおかなかつ

たであらう。

小牧と里村も、同志である中国無産階級の民衆の力になりた  
いと痛感し、彼らとの交流によって、中国のプロレタリア革命  
への支持の気持ちを固めたのである。例えば、五月号の短信欄  
「文芸戦線」<sup>19</sup>に、里村は次のように記している。

作家よ、汝の憂鬱の眼をあげよ！

支那は無軌道で突破するタンクだ。列強帝国主義、軍閥  
輩を蹂躪して、遮二無二「青天白日満紅」の国民革命旗を、  
彼等の死屍の彼方に押し立てやうとする！

作家よ、汝の憂鬱な眼はそこに開かれなければならぬ！

だが、支那は今、寄つてたかつて打ちのめされる「小児」  
だ！

出兵！艦隊派遣！

支那全土は靡く「青天白日旗」はもぎ取られ、引き降ろ  
されやうとしてゐる！

作家よ、汝の口は軍国主義への抗議のために開かれなけ  
ればならぬ！

革命に失敗した中国を体験した里村は、革命の象徴であつた

「青天白日満紅」旗はその意味が次第に失われていくことを強  
調した。日本のプロレタリア文学者に対して、中国革命の現実  
を見て、日本を含めた帝国主義国家に対する抗議をするべきだ  
と呼びかけたのである。

さらに、派遣員である二人が書いた「新軍閥蒋介石の正体」  
には、「蒋介石は支那の反帝国主義××（引用者注、革命）を  
まんまと列強帝国主義に売つたのである！が、支那のプロレタ  
リア革命はそのまま泣き寝入りになるものではない。その熱と  
飽までプロレタリアのための精神は我が社のために特に提供し  
た別録の文意に於いても明らかであろう。我等の先輩である支  
那×××（引用者注、共産党）を支持せよ！」とある。文芸戦  
線社もこの二人の宣言と同じように、中国のプロレタリア革命  
を支持し、中国文学者の文章を紹介した。『文芸戦線』は、日  
中プロレタリア同志の精神的な交流の場となり、世界の無産階  
級が中国プロレタリア革命への理解を呼びかける根拠地の一つ  
となつたと言える。

## 2、中国人作家によるメッセージ

六月号の巻頭言の次の頁には、郁達夫の「日本の無産階級文  
芸界同志に訴ふ」という二つの言語で書かれた文章が掲げられ

ている。これも里村・小牧の上海行の成果の一つであり、日本同志への呼びかけである。

蔣はいま、更に英国帝国主義者と日本の資本家および支那旧日の軍閥と一気聯合して協力高圧政策、○○政策を敢行してゐる。(中略)

無産階級者はただ階級あるを知つて、祖国あるを知るべからず、就中、プロレタリアや文芸戦線戦士は国境の觀念があつてはならない！

日本の無産階級が我々を助けたことを我々はこれを十分に認め、ここに謝意を表さなければならぬ。今後我等は更なる密接なる提携、強烈な互助を望むものである。<sup>(20)</sup>

日本の無産階級の支持に感謝し、この文章を寄せることによって、日中のプロレタリア作家たちの交流の深化が期待されていた。

郁達夫の文章のほかに、同号に郭沫若、郁達夫、魯迅など八人の署名がある「支那事情資料」として「中国文学者の英国智識階級及び一般の民衆に対する宣言」も掲載された。単援朝氏は、「この二篇の文章は文学と政治運動との結合の例として、『文

芸戦線』の一部の同人に影響を与え、日本無産階級文学運動の内部理論と組織の分化を間接的に促進したことは有意義である(拙訳)<sup>(21)</sup>と論じた。

当時、国民革命軍の北上とともに、イギリスが中国へ出兵し、上海を中心に、公共租界の居留民に匹敵する多数の重装備兵が各要衝に配備され、米、日、英を中心に五〇艘余の艦艇が上海沖に待機していた。その状況に対して、以下のような国際的協力を求める宣言が行われた。

我々の闘争は、すべて資本帝国主義に向かつてゐる、我々は只我々を搾取する帝国主義者の手から生活を奪還するより以外に目的はない。(中略)我々は英国の無産階級が万胸の同情を以つて、我々及び全世界の無産民衆と団結して、共同に資本帝国主義を打倒することを希望するのである。(中略)イングランドの無産民衆も、我々を援助するために、諸君はその国内に於いて帝国主義に向かつて進攻されんことを希望するものである。<sup>(22)</sup>

帝国主義国家の出兵は革命を阻止する巨大な力であり、中国の無産階級文学者たちは、イギリス及び世界の無産階級の同情

と支持を得るために、宣言をヨーロッパに送った。それが『文芸戦線』にも掲載されたのは、中国プロレタリア革命が掲げた「反帝国主義の思想を認め、日本の無産階級の人々からの支持を呼びかけているからであろう。

北伐戦争期の上海で中国のプロレタリア作家と交流した以外に、革命が終わった後、日本で中国の作家たちと『文芸戦線』の同人たちの交流もあった。例えば、山田清三郎は、一九二八年のエッセイに郭沫若、成仿吾を訪問したことを書いている。戦後の回想にも、日本に亡命した郭沫若のところを何度も訪ねたことが書かれている。また、平林たい子の回想に、「千葉県市川にゐた郭沫若氏と文戦とは、いつも交渉があつたが、里村の上海行で田漢、郁達夫、成仿吾などとも交渉を持つことになつた。」とあるように、里村・小牧の上海行は、『文芸戦線』同人と中国のプロレタリア作家の交流関係を築ききっかけとなる重大な意義を持つていたと言える。

編集の山田清三郎は、「日支プロレタリア作家の接触提携、それは、今後、あらゆる機会と問題をとらえて、我々のなさなければならぬ任務の一つである」と考え、『文芸戦線』に中国人作家の作品も積極的に掲載していった。では、両国の作家の交流を踏まえて、両国の作家たちが『文芸戦線』に発表した

プロレタリア作品はどのようなものがあるのだろうか。北伐戦争を題材にした小説や随筆は里村欣三の「疥癬」「動乱」などがあるが、以下では、北伐革命を題材にした日中の詩人の革命詩を取り上げ、分析していく。

#### 四、北伐戦争をめぐる日中詩人の創作

日本人作家が書いた北伐戦争を題材した革命詩には、上里春生「上海総罷業の日に」（一九二七年四月）、寺沢資郎「押しひしがれた―上海―」（一九二八年五月）などがある。また、一九二七年八月号に「支那革命詩抄」という特集が組まれ、賀樹「宿の夜」、失名氏「我等の誓詞」、紅萸「風声」、劉啓龍「北伐諸將士に」、無名氏「歌」という五人の詩が翻訳された。翻訳者の山口慎一は、満鉄派遣留學生として上海の東亜同文書院二十五期生であり、在学中に田漢、郁達夫と交友をし、帰国後、中国人作家の文学作品を翻訳紹介した。まずは、上海第三次暴動の日についての詩を考察していく。

上里春生「上海総罷業の日に」

南軍が来た！南軍が来た！南軍が来た！

トラックは、吠える、吠える、吠える。

(中略)

おお、革命だ、革命だ、嵐だ、嵐だ、嵐だ。

(中略)

不気味な嵐の前兆よ！

怖ろしい死の沈黙よ、活動よ！

今、上海が仰ぐ時計台は、

正しく「十二時」を指差してゐる。

(中略)

雄々しい青服の工人達よ！

(中略)

君達は今こそ上海の上に生々とした影刻の美を施さう

とする！（思い切つて贅沢に）

大喜！君達が祝ふ真赤な休暇よ！芸術祭よ！

「南軍」と「トラック」というイメージは始まりと終わりの

部分で二回登場する。「南軍が来た」と「トラック」は上海市

内の革命の始まりと高潮の合図を意味している。上海総罷業は

北伐革命において、国民革命軍上海入城に呼応するという目的

を果たす役割がある。「トラック」が上海に入城すれば、革命

の勝利が見える。「革命」と「嵐」が重ね合わされることで、革命が逆らうことができない勢いで襲来することが強調されている。糾察隊と工人は協力し合う「力」と上海警察署や軍閥などの力の対峙があるが、革命運動を阻止することはできなかった。

戦闘は「十二時」に、一斉に始まった。「上海工人三月暴動記実」を確認すると、「三月二十一日正午十二時、(中略)すべての工人が罷業し、市街の中心にきた。(中略)完全に肅清する空気に全市が包まれ、絶えない銃声と群衆の革命の叫び声しか聞こえない。(中略)すべての警察署の前に、銃が出され、白旗が掲げられた。これは警察たちの降参だ。(中略)まもなく、指揮の中心地を進出し、各地域の作戦指揮が集まった。このように、都市暴動の戦いの局面になった。」(拙訳<sup>27</sup>) 詩にある通り、工人たちは規律よく、作戦通りに暴動を進めており、革命勢力が組織化されたことを評価していると考えられる。

詩の中には、革命勢力が「魔神」のように、上海の各重要拠点を占領し、「打倒軍閥」「打倒帝国主義」「打倒孫伝芳」などの宣伝ビラが、「斬奸状の花弁」のように上海中に撒かれたという革命軍が入城前の上海の状況が描かれている。上海は革命によって沸騰したことが伝えられ、革命への憧憬が読み取れる。

また、プロレタリア革命は、「赤」のイメージで、工人達の祭りとして描かれている。工人達は街中に出て、民衆達と合流し、「風」のような「革命」を起こしたのであり、革命は工人達にとつての祭りとして賞賛されている。

また、寺沢資郎の「押しひしがれた―上海―」では、一時的に勝利した革命が、クーデターによって失敗した上海の状況や殺害された無産階級の群衆を中心に描かれている。

ひきさかれたロボット等のうめき声が……………

ああ、戦争に押しひしがれた上海の巷よ

(中略)

貪欲な北欧の狼と

金モールのブルドッグ

狡猾な東洋の小猿とを

どろどろの溶鉱炉に叩きこんだら……

又は十字架に懸けて火焙りにしたら……

ああ、どんなにロボットなどの顔に朗らか微笑が浮かぶ

だろう

工部局の空に漲る層雲が暴風雨を喚び血の雨を降らす

日を思へ！

租界を揺り動かしつつ走る旋風がやがて

動乱の銅鑼を鳴らす時を思へ！

その時迄―

ロボット等よ

支那は色分けされた世界地図だ

帝国主義国家の出兵や革命運動の反動派によって鎮圧された民衆達がこの詩における「ロボット等」である。「貪欲な北欧の狼」はロシアであり、「金モールのブルドッグ」はイギリスであり、「狡猾な東洋の小猿」は日本を指し、これら帝国主義国家群を排除したら、民衆達が喜ぶだろう、と歌った。しかし、クーデター後の上海はまだ帝国主義国家の占領のもとにあるため、民衆は「ロボット」のように生きるしかない。ただ、希望を全て失ったわけではなく、もう一度立ち上がれば、革命の勝利を勝ち取ることができるかもしれないと詩人が中国の群衆たちに励ましの言葉を送っている。

日本人作家の詩は、第二人称や第三人称などの他者の視点から、革命に参加している人を応援しているように書かれた。一

方、中国人作家たちは、革命者の当事者として、第一人称で語った。特に、劉啓龍の「北伐将士の前に」には、北伐戦場へ向かう戦士たちに対する尊敬が読み取れると同時に、革命運動がもたらした痛みにも注目している。

私の心弦は限り無き興奮を惹起してゐるけれども

私の心の底では却つてまた限り無き愴痛を感じてゐる！

(中略)

北伐は同胞を殺すのではないか？(中略)

だが、「一国の悲しみを一家の悲しみと比較する事は出来ない」

そうだ帝国主義者は我々に迫つて斯くせざるを得ざらしむのだ。

劉啓龍は、戦場に立つ戦う戦士の視点から同胞と戦うことを迫られた苦しみを描いた。国民革命は、反帝国主義という性質を持っているが、直接に帝国主義国家とは戦えず、これらの道具である軍閥を倒そうとする。自分の国で土地を破壊したり、自分の同胞を殺したりするという「愴痛」は、中国人プロレタリア作家ならではの描き方である。プロレタリア作家たちは革

命の理想を熱意をもって語るが、革命の背後にある犠牲も民衆に伝えている。『文芸戦線』は、さまざまな角度から革命を表現する作品を掲載することによって、民衆にプロレタリア革命の全体像を提示しようとしていると考えられる。

### まとめ

本稿では、『文芸戦線』の性格に着目し、転換期における編集方針が、革命運動の政治的なものを避けることから、「政治的暴露」へと転換し、掲載される評論と文学作品とが政治運動と結びつく可能性を明らかにした。

文芸戦線社は、中国革命への関心を高め、国際的な革命運動への参加を目指して、持続的に中国革命運動の状況を日本のプロレタリア同志たちへ伝え、中国革命を支持するために、「山東出兵」への反対や蒋介石の反動政策への非難など政権に対する批判の言説の産出の場となった。また、中国に同人を派遣し、中国プロレタリア文学者たちとの交流を保つことで、日中プロレタリア作家たちの思想はより多くの人に読まれ、作家の影響力も大きくなった。さらに、中国のプロレタリア作家が革命の反動勢力に追われた時、より多くの同志を獲得するために、呼

びかける文章も掲載され、世界の無産階級が中国プロレタリア革命への理解を求める拠り所の一つともなったと言える。

〔注〕

- (1) 「文芸戦線綱領」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二四年六月)
- (2) 祖父江昭二「解説」「文芸戦線」復刻版別冊(日本近代文学館、一九八三年十二月)を参照
- (3) 田中憲一「プロレタリア文芸運動の現段階と其の任務」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二七年四月)
- (4) 山田清三郎「文芸戦線」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二七年五月)
- (5) 山田清三郎「新主体の確立と『文芸戦線』」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二七年七月)
- (6) 青野季吉・田中憲一「労農芸術家連盟綱領(草案)」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二七年七月)
- (7) 栃木利夫・坂野良吉「中国国民革命―戦間期東アジアの地殻変動」(法政大学出版局、一九九七年十二月)を参照
- (8) 「労農芸術家連盟情報」「文芸戦線」(文芸戦線社、一九二七年七月)
- (9) 島田昭男「上野壮夫」『日本近代文学大事典』(講談社、一九八四年十月)を参照
- (10) 森山重雄「佐野袈裟美」『日本近代文学大事典』(講談社、一九八四年十月)を参照
- (11) 佐野袈裟美「支那の国民革命とその必然的展開」『文芸戦線』(文芸戦線社、一九二七年四月)
- (12) 佐野袈裟美「支那革命の危機」『文芸戦線』(文芸戦線社、一九二七年六月)
- (13) 柏八里「中国国民革命の反動政策」『文芸戦線』(文芸戦線社、一九二八年五月)
- (14) 同前
- (15) 山田清三郎「支那の二作家を訪ねて」『戦旗』(全国無産者芸術連盟本部、一九二八年七月)
- (16) 小牧近江「上海行き」『ある現代史―種蒔く人前後―』(法政大学出版局、一九六五年九月)
- (17) 山田清三郎「日中無産階級文芸家交友のさきがけ」『プロレタリア文学風土記―文学運動の人と思ひ出』(青木書店、一九五四年十二月)
- (18) 郁達夫・王映霞「郁達夫日記九種及其他」(香港宏業書局、一九六三年)

(19) 里村欣三「文芸戦線」『文芸戦線』（文芸戦線社、一九二七年五月）

(20) 郁達夫「日本の無産階級文芸界同志に訴ふ」『文芸戦線』

（文芸戦線社、一九二七年六月）

(21) 単援朝「日中无产阶级文学运动的第一次握手——小牧近

江、里村欣三上海之行考」『郭沫若学刊』（四川省郭沫若研究学会、二〇二一年三月、135号、58—69頁）

(22) 本誌派遣員「中国文学者の英国智識階級及び一般の民衆に対する宣言」『文芸戦線』（文芸戦線社、一九二七年六月）

(23) 注(15)に同じ

(24) 注(17)に同じ

(25) 平林たい子『自伝的交友録・実感的作家論』（文藝春秋新社、一九六〇年十二月）

(26) 注(15)に同じ

(27) 施英（本名：趙世炎）「上海工人三月暴動記実」『嚮導』第一九三期一九二七年四月六日

〔付記〕

・本稿は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2150の支援を受けたものである。

・本稿は、東アジア文化交渉学会第14回国際学術大会（二〇二二年五月七日）における口頭発表に基づくものである。発表に対しご教示を賜った皆様や、発表の機会を与えてくださった皆様、厚く御礼申し上げます。

（しゅう きんき／本学大学院生）